

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2023年 4月 14日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所 属 部 局 人 文 科 学 研 究 所

職 名 助 教

氏 名 宮 紀 子

助 成 の 種 類	令和4年度 ・ 研究活動推進助成			
申請時の科研費 研究 課 題 名	多言語文献・図像・文物資料による『元史』本紀と『明実録』の再検証			
上記以外で助成金 を 充 当 した 研 究 内 容	無し			
助成金充当に関 わる共同研究者	(所属・職名・氏名) 無し			
発表学会文献等	(この研究成果を発表した学会・文献等) 「モンゴル時代の『知』の遺産」東方学会秋季学術大会(オンライン) 2022年11月5日、「大(イェケ)モンゴル国(ウルス)からみたヨーロッパ」東北大学西洋史研究大会 共通論題「13世紀ユーラシアにおけるキリスト教世界とモンゴル帝国」(オンライン) 2022年11月20日、「モンゴル時代史鶏肋抄(13)～(24)」『究』No.136-147 ミネルヴァ書房 2022年7月～2023年6月			
成 果 の 概 要	研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)			
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	500,000	円	
	使用した助成金額	500,000	円	
	返納すべき助成金額	0	円	
	助成金の使途内訳	費 目	金 額	
		図書購入費	500,000	

当財団の助成について
人文系の個人研究の科研費申請において、一課題の終了時点から連続した新規課題の採択は少ないらしく、申請者もその都度「中国文学」「比較文学」「史学一般」「東洋史」等、分野を変更して申請するなど対処してきたが、研究生活ではじめて助成金を得られない事態に直面した。円安の状況下、助教の俸給のみで多言語の資料を収集するには限界があったが、民間の助成金と異なり、空白の一年間をしのぐ救済を主旨とし、年齢制限もない本制度は、極めて有難かった。欧米、トルコ、イラン、中国、ロシア等海外の資料・書籍蒐集を中断せずに実施、次年度に繋がる研究成果を出すことができ、令和5-9年科研費基盤研究C「多言語文献と図像・文物資料で読み解くモンゴル時代の「知」の革新・創生と伝播・継承」の採択が決まった。感謝に堪えない。こんごとも是非この助成活動を継続していただきたい。

成果の概要／宮 紀子

研究課題

多言語文献・図像・文物資料による『元史』本紀と『明実録』の再検証

研究内容

これまで進めてきたモンゴル時代、ポスト・モンゴル時代の「『知』の伝播と継承」「軍事・外交」研究を下敷きに、13～15世紀の「東アジア」の歴史の基本資料として用いられてきた『元史』の「本紀」と『明実録』を読み直し、大幅な加筆・修正を図る。具体的には両書の記述を、膨大な漢文資料、『オルジェイトゥ史』『ヴァッサーフ史』等の歴史書をはじめとするペルシア語文献、アラビア語、日本語、テュルク・モンゴル語、ヨーロッパ諸語の原典資料、図像・出土文物等の資料と細部にわたるまで徹底的に照合・分析し、アフロ・ユーラシア史の観点からひとつひとつ再構成してゆく。その作業のなかで「大本営の発表に書かれないこと」の特徴も浮かび上がらせる。また「モンゴル時代史研究」の手法を大明時代前半に^{だいみん}応用し、日本の「明代史」研究に一石を投じることを目的とする。

研究成果

講演

- ・「絵図で読み解くモンゴル時代の東西交流」京都国立博物館第89回夏期講座「動乱の時代——14世紀」 2022年8月5日
- ・「モンゴル時代の『知』の遺産」東方学会秋季学術大会（オンライン） 2022年11月5日

シンポジウム

- ・「大^{イエゲ}モンゴル^{ウルス}国からみたヨーロッパ」東北大学西洋史研究大会 共通論題「13世紀ユーラシアにおけるキリスト教世界とモンゴル帝国」（オンライン） 2022年11月20日

MISC

- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（13）描かれたヨーロッパ」『究』No.136 ミネルヴァ書房 2022年7月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（14）ヨーロッパの権力者たち」『究』No.137 2022年8月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（15）ヨーロッパからの輸入品」『究』No.138 2022年9月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（16）^{あま}天翔ける駿馬」『究』No.139 2022年10月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（17）君主は金繡がお好き」『究』No.140 2022年11月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（18）ファッションモードはカアンから」『究』No.141 2022年12月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（19）消化・継承されるファッション」『究』No.142 2023年1月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（20）オルガンの調べに乗せて」『究』No.143 2023年2月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（21）奏で称えよ、我らが黄金の歴史を」『究』No.144 2023年3月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（22）まずは跪いて拝め」『究』No.145 2023年4月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（23）酒宴におけるエチケット」『究』No.146 2023年5月 pp.40-43.
- ・「モンゴル時代史鶏肋抄（24）^{おいて}追風に帆かけて大都へと」『究』No.147 2023年6月 pp.40-43.

副産物

本研究の過程で、アルメニアのマテナダラン文書館に朝鮮王朝の金宏弼（1454-1504）『景賢續録』の版木（1719年）が蔵されていることに気付いた。韓国の研究者に情報提供したところ、『朝鮮日報』（2022年10月1日）に紹介記事が掲載された。

今後の見通し

本研究をもとに科学研究費（基盤研究C）の採択が決まったので、研究を継続・展開してゆきたい。上記講演・シンポジウムの内容は学術論文として投稿予定。今後の研究成果についても、学術論文と平たくわかりやすい形（一般向け）の両輪で速やかに公表する。後者については幸い、現時点で連載のほか、一般書の執筆依頼を三件いただいております（うち一件の依頼は本研究の成果による）、社会還元の手段は得られている。